

鹿児島紀行

フィレンツェ大学日本語学文学 教授 鷺山 郁子

鹿児島には、学生時代に一度訪れた事があるが、イタリアの縁でナポリ通りの並木道をかすかに覚えている程度なので、今回が初めての滞在と言ってもいい。3月15日に羽田から鹿児島空港に降り立った時点で、暖気を含んだ微風にそよぐ棕櫚に、南国の気が横溢していた。

鹿児島大学建築学部の鯨坂徹先生が車で迎えて下さり、その足で先生が保存に尽力しておいでの大蔵集落、加世田に案内して頂いた。お話はかねがね伺っていて、写真も見ていたが、やはり現地で町の手触りのよ

うなものに接するのは格別で、鯨坂先生の愛着なさるのももっともと感じられた。知覧も見せて下さったが、こちらは保存状態がしっかりした野外歴史博物館といった趣きで、それはそれで大変感銘を受けたのだが、加世田の方は現在生活している人達がいて、その人達が町の一部となって呼吸している感じに得難いものがある。

翌日はセンターの丹羽謙治先生、鈴木優作先生が、かごしま近代文学館と黎明館に連れて行って下さった。近代文学館では、学芸員の方の丁寧な解説付きで、鹿児島に

関わりのある作家達の展示を観たが、鹿児島を題材あるいは背景にした文学作品がこんなにあるとは、浅学にして知らなかった。黎明館の方は展示物が充実し過ぎて、全ては見られなかったが、どちらもキュレーターの人達の熱意と鹿児島への愛、また子供を含めた来館者の興味をそそる工夫など、配慮が行き届いているのに感心した。イタリアだと、数多の美術品そのものの価値に依存する傾向があり、そういった取り組みは比較的最近のものと思われる。

17日はシンポジウムが開催された。市民に開かれたイベントという事で、聴衆の方々も多様、多彩。和やかな雰囲気の中に真剣さも看取されて、議論も活発に展開し、羨ましいような気がした。というのも、イタリアでも研究成果の社会還元という事がやかましく言われるようになり、いわゆるパブリック・エンゲージメントをせせとやらないと予算を減らされるという脅威まであるのだが、これが実はけっこう難しい。学外でやらなければいけないという制限もある。私のある若手同僚は、学科からその担当委員に任命されて、会場探しや企画の持ち込みであちこち奔走し、イベント屋になってしまったとこぼしている。「鹿児島の近現代」センターのように、研究、教育、社会発信を並行して有意に行なえる機関が、大学のきちんとしたバックアップの元に設立できれば何よりなのだが、現状では夢のような話である。

ともあれ、今回の鹿児島滞在は、色々な意味で私にとって大変楽しく、また勉強にもなった。エピソードには事欠かないのだが、一つ挙げると、かごしま近代文学館を訪問した後、昼食をとった店に、店員に苦言を呈している初老の男性がいた。どうやら、店に入ったら予約で満席と言われ、空いている席があるのに客を断るとは何事かと怒っているらしい。支払いの時もレジの

店員に懇々と意見していたが、後で丹羽先生が、ああいう薩摩人を昔はよく見かけたというような事をおっしゃった。今ではモンスタークライアントというレッテルを貼られてしまうが、それなりの理屈がないわけではないし、実は薩摩気質の典型なのかと、いたく感心した次第である。そういう人が希少になったというのも何やら寂しい事だが、時代の趨勢は如何ともし難い。

ところで、薩摩といえば焼酎。これも、もちろん堪能したが、ホテルのロビーに焼酎三種試飲コーナーというのがあって、これがなんと一升瓶三本がどーんと置いてあって飲み放題なのには驚いた。さすが鹿児島。しかも、氷や水や、おつまみまで用意してある。そういえば、昔、イタリアの鯇バーで、アルコール度25の麦焼酎を飲んでいたら、隣のテーブルにいた鹿児島県人の男性に、そんなものは焼酎じゃない、飲むなと叱られた。本当の焼酎と言えるのは35度以上の芋焼酎だけだそう。確かに、私が大昔九州を訪れた頃の焼酎は、度数も匂いもかなり強かったと記憶している。口当たりが良くて、味も香りも柔らかめなのは、その後、人気が出たように思う。それにしても、その男性も、今や少数派の生粋の薩摩人だったのだろうか。

帰路、空港に向かう時は、フィレンツェ大学にいらした逆瀬川さんが車で送ってくれた。わざわざ景観の良い湾岸沿いを走って下さったが、初日に鯨坂先生が、桜島は見る角度によって形が変わるんですよと教えてくれた事を、あらためて実感した。鹿児島も同じく、見るアングルによって、様々な面を見せてくれるに違いない。短期間の滞在で、鹿児島の魅力の一端にしか触れられなかったが、機会を与えて下さった鹿児島大学の皆さんに心から御礼申し上げたい。